

イタリアに広がる日本語専攻者 —社会的背景および専攻選択プロセスに関する実証研究

文学研究科
人間行動学専攻 社会学専修
博士後期課程3年 西田翔子

研究目的

- 対象：イタリアの大学で日本語・日本研究を専攻する学生（以下、日本語専攻者）
- 目的
1) 日本語専攻者の社会的背景を明らかにする
2) 日本語専攻を選択し、専攻するプロセスを日本語専攻者がいかに意味づけているのかを明らかにする

背景

イタリアの日本語専攻者数は近年増加、世界有数の規模

表1 海外の高等教育機関における日本語専攻者数（2021年）

順位	国	人数
1	中国	179,966
2	韓国	20,163
3	台湾	19,423
4	ベトナム	14,144
5	インドネシア	11,826
6	タイ	7,956
7	米国	6,371
8	フランス	6,348
9	イタリア	3,886
10	ドイツ	2,460

国際交流基金の調査結果（2023）
をもとに筆者作成

先行研究

- 問いの中心：
なぜ日本語を選ぶのか（学習動機）
- アニメ・マンガなど文化への興味から日本語専攻を選ぶと説明される傾向（Mariotti 2015；ルペルティ 2017等）

問題意識

- 専攻選択はライフコースにおける重要な決断
→対象への興味以外にも、本人の社会的背景（出身家族・教育背景）や他の選択肢との比較など、複数の要因が影響しうる
- 本研究の問い：**いかに**日本語を選んだのか
→専攻選択のプロセスと本人の意味づけに注目

〔調査1〕日本語専攻者は、 いかなる社会的背景を持つのか？

〔方法〕

イタリアの大卒者を対象とする統計調査（AlmaLaurea 2024）を分析 ※調査分析の詳細は西田（2025）

〔結果〕

他専攻群と比較して語学専攻（日本語専攻を含む）は以下の傾向がある

- 低階層出身・大学第一世代（親が大卒未満）
- 高校修了試験の得点率が高い

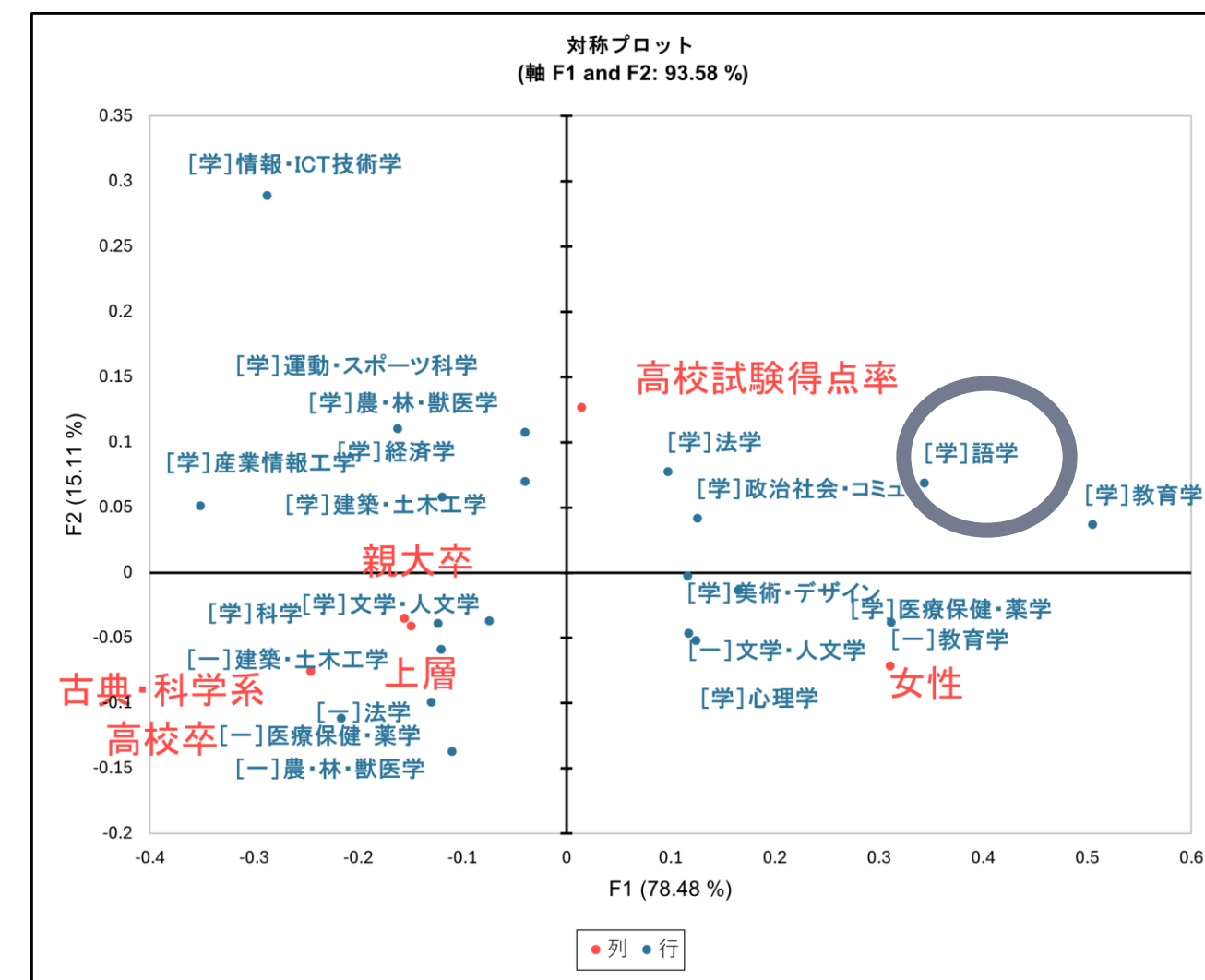


図1 対応分析：各専攻群の位置付け（西田 2025）

各専攻群の卒業生について、社会的背景に関する変数〔親の大卒割合、上層出身割合、古典系および科学系高校出身割合（一般的に大学進学希望者が選択する高校の種別）、高校修了試験得点率、女性割合〕との関係性を、対応分析により可視化した。

〔考察〕

- 労働市場での評価がより高い専攻（例：法学、医学、工学など）に進む学力はあったが、それを選ばずに、日本語を選択した可能性が高い
- 他の専攻ではなく、日本語専攻を選択するに至った経緯はいかなるものか？→調査2へ

〔調査2〕日本語専攻を選択し、日本語を専攻するプロセスを、日本語専攻者はいかに意味づけているのか？

〔方法・分析枠組み〕

インタビュー調査

- イタリアの日本語専攻者（在学生・卒業生）14名が対象
- 中学・高校時代（進路選択過程）、大学入学後の生活、卒業後の進路を語ってもらう

語りの分析

- H. Sベッカーの「キャリア」概念（Becker 1963=2011）を参照
- 日本語専攻選択は、日本語専攻を自らの属する集団として選び、その一員に「なっていく」プロセスである
- 大学入学後、日本語専攻者同士の相互作用によって、集団の「サブカルチャー」が形成される可能性がある

〔典型的な語り〕

① 中学・高校時代への否定的評価

A：頭の中で日本を「理想的な国」みたいに、つまり、すべてがうまく機能していて、みんな優しく、完璧で、まあ、自分が中学生のころに生きていた場所とは対照的なものとして見ていたんです。その頃は、あまり学校での居心地はよくなかったし。（中略）。つまり、イタリアの、この、いいオルタナティブに見えたんです。

② 他専攻群との相互作用により、日本語専攻者「らしさ」を形成

B：中国語を勉強する人は、みんなかっこよくて、経済がしたい人。（中略）。日本語（専攻）の人たちは、ちょっとコミュニティーっていうか、同じにおいしますよね。

現時点での考察・今後の課題

- 日本語専攻者に「なっていく」プロセスには、中学・高校や、その延長線上にあるだろう世界・価値観を退けるプロセスが、しばしばともなう
- 日本語専攻者の語りの収集・分析をさらに進め、日本語を学ぶことが、イタリア社会においてどのような意味を持っているのか、明らかにしていく

〔主な参考文献〕

AlmaLaurea, 2024, "Profilo dei laureati" <https://www2.alma laurea.it>
Becker, H. S, 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, Glencoe: The Free Press. (村直上之訳, 2011, 『完訳アウトサイダーズ——ラベリング論再考』, 現代人文社.)
国際交流基金, 2023, 「海外の日本語教育の現状——2021年度海外日本語教育機関調査より」
西田翔子, 2025, 「イタリアの大学における語学専攻者の出身階層と教育背景に関する分析」『都市文化研究』27: 66-80.
Mariotti, M. M., 2015, "Japanese Language Learning through Authentic Materials: Insights from an Italian University Case Study," Paolo Calvetti and M. M. Mariotti eds., *Contemporary Japan. The Challenge of a World Economic Power during a Period of Transition*, Venezia: Edizioni Ca' Foscari, 131-148.
ルペルティ, ボナヴェントゥーラ, 2017, 「イタリアの日本研究——文化の多様性を生かす」『世界の日本研究』, 112-127.